貴方にもこの潮風を樹の匂いを

桐島洋子

貴方にもこの潮風を樹の匂いを

桐島洋子

文藝春秋

著者略歴

1937（昭和12）年東京生まれ。56年都立駒場高校卒業。56～64年文藝春秋に勤務。64年よりフリーのルポライターとして海外各地で取材活動を続け，72年にアメリカ在住の体験を綴った「淋しいアメリカ人」で第三回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。著書に「淋しいアメリカ人」「マザー・グースと三匹の子豚たち」（文藝春秋）「風の置手紙―渚と澪と舵へ」（R出版，角川文庫）「女がはばたくとき」（PHP）「女ざかりの美学」（じゃこめてい出版）「聡明な女は料理がうまい」（主婦と生活社）「さよならなんてこわくない」（交通公社）等多数ある。

貴方にもこの潮風を樹の匂いを

定価　800円

1978年7月20日第1刷
1978年10月1日第2刷

著　者　桐島洋子

発行者　阿部亥太郎

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3
電話　03―265―1211（代）

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

© Yoko Kirishima 1978　Printed in Japan
万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目

次

この手紙は焼かないで……　7
遅れて来た蜜月　25
わたしの〝父親育児年〟　43
今、とても日本が恋しい　63
帰りなんいざ　台所まさに荒れなんとす　81
テレビに向き直るとき　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子供に未来を　119
四十にして惑う　139
人づくりと家づくり　159
母親は一人ではない　177
宴のあとに残る人を　197

装幀　平野甲賀
写真　アーネスト・バロス

貴方にもこの潮風を樹の匂いを

この手紙は焼かないで……

Y・Tさま

羽田へのお見送り有難うございました。

あなたの姿を見つけて、私、随分びっくりした顔をしていたでしょう。はじめ、偶然かと思ったのです。でも、新聞記事で私の旅立ちを知ってわざわざ励ましに来て下さったのだと聞いて、凄く嬉しくって、抱きつきたいほどだったけど、やめておきました。むかしとちがって、近頃は私もかなり人目につくヒトですものね。あんまり派手に振舞ってあなたまでさらしものになったりしては、御迷惑だと思ったのです。

それでしばらく、群を離れて二人だけでそぞろ歩いていた間、「この人っていいなあ、やっぱり好きだなあ」と、私、無性に懐しい感じにうっとりし続けていました。軽く肩を

触れ合わせながら、いつまででもそのまま歩いていきたいような心持でした。「こういう着なれた木綿の服みたいにさりげなく暖い間柄ってとてもいいものじゃない。どうして私って、いつもこうなる頃には別れてしまうんだろう」と思い返してみると、あなたとは別れようとして別れたわけでもないのよね。お互い、愛想づかしをする理由などありはしなかった。二人が燃え盛っていたときと今と較べて、あなたの魅力が薄れたとは思えないし、私にしたって、そうでしょう。少くとも私はそう自惚れてるわ。だからといって、惚れたはれたでいつまでもいよいよ燃え盛るというわけにはいかないものらしく、火はいつか必ず下火になる。炎をおさめてとろとろと穏やかに赫く燃え続ける炭火というのもいいものだし、私はむしろその穏やかさにこそ憧れているように思われるのに、パチパチと弾けながら、激しく燃え立つ炎の熱さ、美しさが、私をひきつけて離さない。麻薬中毒と同じでしょうね。火が穏やかになり始めると、フッと背中に冷っこい風が吹いたような気がして落着きが悪くなる。そしてまた新しい焚火へと走ってしまう。その繰り返しで、二十代と三十代を過してしまった。

あなたと一緒に焚火をしてたのは、三十代のはじめ頃でしたね。空港を歩きながらあなたもきっと思い出していたでしょう。あの、私がヨーロッパ旅行から帰って来た夜のこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ほんの十日ほどの留守だったのに、あなたが血相変えて……という感じで税関の出口に待ち構えていて、私はそのままあなたの車で伊豆の山奥に拉致されてしまった。私達、三日ぐらい〝行方不明〟だったかしら。

ああいう感じ、あのモミクシャにむしゃぶりあう手応えの中毒なのね、私は。だから一人の男と長続きする筈がない。長続きさせようとしたらお定さんになってしまうんだろうな。そういえば、大島渚さんの「愛のコリーダ」観た？　あれはいいですよ。私、みゆき座で、初日の開幕の司会をしたの。ほんとは小沢遼子さんと私も、芸者役で出演する筈だったのに、その日、国鉄のストで京都の撮影所に行けなくなってしまったの。口惜しかったわ。それはさておき、あの映画には、これまで自分の焚火の奥にひそかにのぞきみるだけだった、飛沫をあげて煮えくりかえる血の色――それはつまり炎の色でもあるのだけれど――の凄まじい美しさが、見事に捉えられぶちまけられているのです。人間って怖いことをしているんだなあと思いますよ。でも私がどうやらお定さんにならずにここまで来たのは、幸か不幸か吉蔵と逢わなかったからでしょうね。あの吉蔵のようにとことん女の情念に殉じてくれる男と一緒に焚火をしたら、たとえガソリンぶっかけてでも最後までバンバン燃やし、折り重なって溶け合うように燃え尽きて……という物凄いことになったかも

しれない。

だが、あなたにしても他の男達にしても、いつかどこかで及び腰になりそうな気配があるし、私がまたそういう気配に極度に敏感な女だから、さっき書いたようにほんのちょっと炎が衰えはじめただけですぐもう火が消えた跡に取り残される寒さ虚しさへの恐怖にとらわれて、また別に新しく烈しい火を起したくなってしまうのです。

いつもモミクシャになって、熱く火照っていないと生きた心持がしないという、この性質、ほんとうに厄介なものだと思います。なんとか、そろそろ静かなとろ火を守って落着きたいものだけど……。

と言いながら、今もまたかなりモミクシャの最中なのです。その彼とあなたとは、空港でちょうどすれちがいでした。「じゃあ、元気でね」とあなたの温い掌が肩に触れて離れて、出国手続きに向う通路を歩き始めたところへ、彼がやっと仕事を終えて駆けつけて来て最後のさよならに辛うじて間に合ったというわけです。さすがにひどく切羽詰った気分になって、つい人目も憚らずに相擁してしまってから「お互いにヤケだね」と苦笑い。

こうしてまだ燃え盛っているうちに、突然地球をはさんで一年余りも物理的に身を離してしまうことが、火に水をかけることになるのか、それとも油を注ぐことになるのかは、

まだわかりません。でも少くとも出発前の数週間は、完全に油を注ぎっ放しの状態でした。それは当然でしょうね。「どうしてこんなにいい火から離れて行くのだろう、別に行かなきゃならない理由などありはしないのに」と、ふとアメリカ行きを悔んでみたり、「いや、もうじき逢えなくなるという切なさがあったからこそ、これほど火勢が強まったのだ。このままおしまいになったとしてもそれだけのことはあったのではないかしら」と思い切りよくしようとしたり……まあ、ともかく大変な数週間でした。

さて、これからどうなりますことか。太平洋は大きいけれど、でも手紙というものがあるのよね。私は、物を書くことが仕事になってからは、むかしほど筆まめではなくなったけれど、それでも恋文ともなればかなり熱心に書きます。あなたとのときは、近くにいて毎日のように逢っていたから、手紙を書いているひまがなかったけれど、〝通い婚〟と騒がれた例の京都のひととは、いつも速達で猛然と恋文を書き合っていた。あれほどヴォルテージがあがった大きな要素の一つが手紙にあることはたしかでしょうね。「ラブレターが洋子の最高傑作だよ。一人で読むのは惜しいみたい。ぼくは洋子の恋文に恋してるのかもしれないな」と彼は言い、毎晩毎晩、「今日も書いてくれた？　書かなかったら、ヒマを出すぞ」と脅迫的な電話をしてきたものよ。ほんとによく書いた。原稿用紙を埋める方

にこれくらいの情熱と時間を注いだら、私だって流行作家になれるかもしれないのに……と思いながら、ペンを持つとついまた恋文を書き始めてしまうという毎日だったわ。

分厚い本の一、二冊ぐらいは十分にできたであろうあのおびただしい手紙の束が、恋の終りと共にあっさり反古になったのだと思うと、恋とはなんと壮大華麗なる浪費であることかと、茫然とするわね。決して浪費を悔む気はないけれど、もう再びあれほどの浪費には耐えられないような気がする。

でも、やっぱり今度も書くことになるのでしょう。相手が、また、いい手紙を書くひとなのよ。もとはといえば、彼からひどく刺激的な手紙を幾度か貰って、私がそれにまた刺激的に応酬したことが、今度の焚火の始まりなのだから。私は、火にくべる言葉をいっぱい持ったひとが好き。あなたもそうだった。そうなのよね、六年前、私をアメリカから日本へよび戻したのは、あなたの手紙だったんだもの。

三歳と二歳と生れ立ての子供を抱えて、その父親と別れ、お金も仕事もないという最悪の状態で、活路をひらこうとアメリカに渡って放浪し、やっとどうやら暮しが立つようになったとき、子供たちへの手紙として書いた、私のはじめての本、そして今でも私が一番好きな本「渚と澪と舵」――あなたはその最初の読者の一人になって下さった。そして、

私が本の著者として、生れてはじめて受け取ったファン・レターが、あなたの手紙だったのよ。

あの手紙を披いたときの情景を、鮮明に覚えているわ。その頃、私の恋人は、離婚してヨットで独り暮しをしている航空技術者で、私はそのヨットで週末を過す習慣だった。たいてい日曜の夜には家に帰るのだけど、別れ難くて月曜まで居続けてしまうこともあり、あの朝も、そういう月曜の朝だったわ。ヨット・ハーバーのクラブ・ハウスで一人前のモーニング・ステーキを二人で分け合って食べてから、辛子色のアルファ・ロメオで出勤して行く彼を見送り、ヨットに戻って船室の掃除をして、それから鍵をガチャガチャ鳴らしながら彼の私書函に郵便を取りに行ったのよ。そうしたら珍しく日本の切手が見えて、それは私宛の航空便だった。おや、どうしてこのヨット気付で……と一瞬不思議に思い、そうだ、あの本のあとがきに「カリフォルニア州レドンド・ビーチ、アンティグア号にて」と書いたのだ、とするとこの手紙は本を読んだ人からの……と気がついて、ザーッと軀の中に潮騒を聴いたような思いだった。船べりにすわって、春のひざしに輝く白い封筒をゆっくりと破っている私の手許を、水鳥の夫婦が涼やかな眼付で見上げていたわ。「今日は。ぼくの名前など多分御記憶にないことだろうと思いますが……」という書き出しだったわ

ね。ほんとにちょっと記憶になかったけれど、読んでいるうちに、そうだ、もう十年近くも前に二度ばかり会ったことのある人だということを思い出し、そして、こんなに素敵な手紙を書けるような人と会ったのに、どうしてあのときなんの事件も起らなかったのだろうと思ったの。

あなたは私の本を激賞して下さった。それはあの頃の私にとって、どんなに貴重なことだったことか。

「こんなに美しい文章を、久しぶりに読みました。こまやかに選びぬかれた一語一語が朝露に濡れたようにみずみずしく光っています」「あなたは、アメリカに沈没してこの日本語を腐らせてしまうつもりですか。日本に帰っていらっしゃい。日本でお書きなさい。もっともっと書いて下さい」

私は揺さぶられました。文章が人を揺すぶるものだということを思い出し、私も書きたい、書こう、もう一度言葉を信じようという気持になりました。

それから一カ月も経たないうちに、私はにわかに、水鳥が飛び立つように、日本へ帰って来てしまったのです。私の恋人はそのとき、友人のヨットに乗り組んでメキシコまで遠征するヨット・レースに参加していました。キャプテン不在のヨットを守って静かな週末

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com